

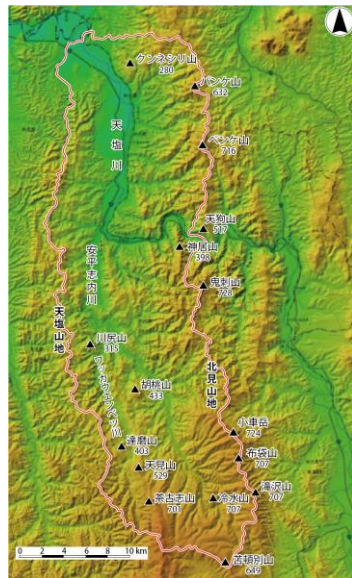
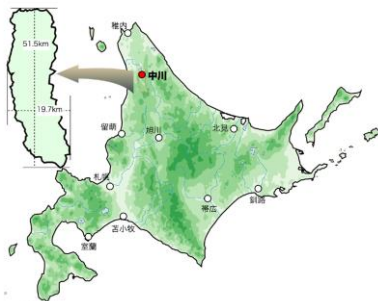
12 / 20 (金) の発表

報道発表資料の配付日時 12月20日(金) 17時00分

発表項目 (行事名)	中川町文化財保存活用地域計画の認定について		
記者レクのお知らせ	(実施日時) 月 日 () 時～	発表者	
		発表場所	
	<p>12月20日(金)に開催された国の文化審議会(会長 島谷 弘幸)において、中川町の文化財保存活用地域計画が認定されましたので、お知らせします。</p> <p>○配付資料 文化庁の報道発表(中川町に関する部分を抜粋)</p> <p>※「文化財保存活用地域計画」とは</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>市町村における文化財の保存と活用に関する総合的な法定計画で市町村の総合計画の下に体系付けられるものとして、平成30年の文化財保護法の改正により制度化されたもの。 計画を作成・実施することにより、文化財を総合的・一体的に保存・活用し、地域の特徴を活かした地域振興に資するとともに、確実な文化財の継承へとつなげる。</p> </div>		
参 考	<p>道内で他に認定されている自治体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・札幌市(令和2年2月14日認定) ・今金町(令和4年7月22日認定) ・中標津町(令和5年12月15日認定) ・別海町(令和6年7月19日認定) 		
報道(取材)のお願い			
担 当 (連絡先)	<p>教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課文化財保護係 (担当 課長補佐 橋本、主査 湯澤)</p> <p>TEL: ダイヤルイン 011-204-5749 内線: 35-620 公用スマホ 011-585-6104 内線: 40245</p>		

01 中川町文化財保存活用地域計画【北海道】

【計画期間】 令和7～16年度
(10年間)
【面積】 594.87km²
【人口】 約1.3千人



中川町とその周辺地形

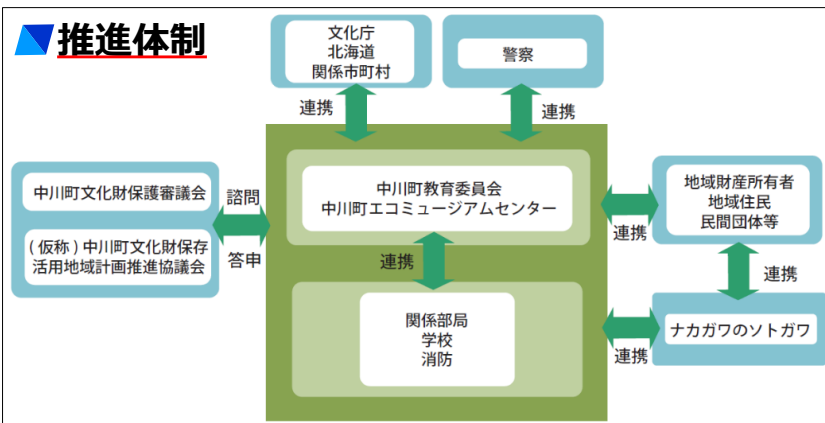
指定等文化財件数一覧

類型/種別		国指定・選定	道指定	町指定	国登録	総数	
1 有形文化財	1 建造物	0	0	0	0	0	
	美術工芸品	2 絵画	0	0	1	0	1
		3 彫刻	0	0	0	0	0
		4 工芸品	0	0	0	0	0
		5 書跡・典籍	0	0	3	0	3
		6 古文書	0	0	0	0	0
		7 考古資料	0	0	1	0	1
		8 歴史資料	0	0	0	0	0
2 無形文化財	0	0	0	0	0		
3 民俗文化財	1 有形の民俗文化財	0	0	2	0	2	
	2 無形の民俗文化財	0	0	0	0	0	
4 記念物	1 遺跡(史跡)	0	0	0	0	0	
	2 名勝地(名勝)	0	0	0	0	0	
	3 動物、植物、地質鉱物(天然記念物)	4	1	7	0	12	
5 文化的景観	0	—	—	—	0		
6 伝統的建造物群	0	—	—	—	0		
合計		4	1	14	0	19	

指定等文化財は19件、未指定の地域財産は352件を把握

※文化財保護法にとらわれない中川町にある全ての文化財の総称を「地域財産」と呼び、地域財産の呼称を「地域財産 ナカガワのナカガワ」とした。

推進体制



※ナカガワのソトガワ；「ナカガワのナカガワ」に対して本町の外側の人材に対する呼称

歴史文化の特性

(1) 中川が海だったころ－化石が語る太古の中川－

本町は中生代(約1億4,000万年前)からの歴史を持ち、アンモナイトをはじめ様々な化石が発見される「化石のまち」として世界的に知られている。新生代(約1,700万年前～100万年前)になるとアンモナイトなどが絶滅し、イルカをはじめとした海生哺乳類や貝類が繁栄し、約600万年前には古天塩川が成立した。

(2) 天塩川とともに－歴史の流れと人々の歩み－

天塩川は日本最北の北流大河で、鉄道や道路網の整備以前は重要な交通路でもあり、川沿いには多くの遺跡がある。明治から入植が始まり、流域の肥沃な土地で始められた畑作は度重なる冷害や水害被害もあり、酪農への転換が進められ、現在の本町農業の体系が確立した。大正から昭和にかけて大規模な天塩川の切り替え工事が進み、新しい流路に永久橋が架けられ、現在の町並みが形成された。

(3) 中川の森の自然誌－大河に抱かれし天北の深山－

本町の森林は、河畔林から針広混交林、ハイマツ地帯まで多様な植生の垂直分布を見せ、蛇紋岩地帯ではアカエゾマツ純林やオゼソウ群落など特殊な植生も認められる。カタクリは本町が分布の北限域である。オジロワシ(天然記念物)をはじめ、北海道固有種や中川町固有亜種の昆虫や貝類が生息する。現在は自然環境に配慮した森林管理や木材利用計画のもと、薄利多売をしない森づくりが進められている。

(4) 農業の変遷－受け継がれる農の文化－

天塩川と安平志内川流域で始まった農業は、幾多の変遷や転換を経て「最北の畑作」と「酪農」という特徴が形作られた。特に薄荷は、大正から昭和初期まで「薄荷の中川か中川の薄荷か」といわれるほど生産が盛んであった。

(5) 茂吉のみた中川－安平志内川流域の開拓－

安平志内川流域の開拓は、“内地”からの移民入植を目的に上流部へと進められ、共和、板谷、大和地区は「薄荷」生産によって拓けていった。昭和7年に共和地区で医師を営む兄を訪れた歌人の斎藤茂吉は滞在中の5日間で57首の歌をつくり、当時の中川の様子を写實的に詠んでいる。

【基本的な理念】 地域財産の継続的な把握に基づき、 町内外の連携を見据えた組織・仕組みづくりにより保存・活用を進める

- 1 調査・研究
- 2 保存・管理・継承
- 3 普及・活用
- 4 連携体制
- 5 学校教育・生涯学習
- 6 保存・活用の拠点

課題

- 地域財産の継続的な調査が必要
- 地域財産の保存・管理が不十分
- 周辺環境の整備が必要
- 地域財産の継承の仕組みが未構築
- 地域財産の防災対策の連携不足
- 多くの人に伝わる情報発信が不十分
- 他産業との連携不足
- 地域や関係団体との協働不足
- 広域的な連携が限定的
- 学習機会の更なる充実が必要
- エコミュージアムセンターの適正な維持・管理・運用体制の確立が必要
- 地域財産と触れ合う場の創出が必要
- 地域財産のデジタル化による継承が不十分

方針

- 地域財産の把握・調査の推進
- 地域財産の適切な保存・管理
- 所蔵施設の管理・運用
- 地域財産の保存・管理への支援
- 周辺環境の整備の推進
- 大学や団体との連携
- 担い手の確保・育成と運営組織・体制の確立
- 地域財産の防災対策の推進
- 情報発信の推進
- 他産業との連携による活用の推進
- 地域や関係団体との協働の推進
- 広域的な連携の推進
- 学校教育による郷土愛の醸成
- 学習機会の充実と新たな活用の検討
- エコミュージアムセンターの適正な維持・管理の推進
- 研究の推進
- 体験学習やイベント等の開催
- デジタルコンテンツの活用

措置の例

1-3 地域財産の調査

地域財産投稿システムを活用し町内外の方々と調査を進め、結果をVR中川エコミュージアムで公表する。
 ■行政、専門、団体、町民、ナカガワのソトガワ ■R7~16



2-18 担い手の確保・育成 (町外)

北海道大学中川研究林公認ガイド育成事業や普及事業のリピーターなどから担い手の確保・育成を行う。
 ■行政、ナカガワのソトガワ、専門、団体、町民 ■R7~16



3-2 SNSを活用した情報発信

Instagram等のSNSを活用し情報発信する人材を育成する。
 ■行政、団体、ナカガワのソトガワ、専門、町民 ■R7~16



4-1 関係団体との連携

中川町アウトドア協会、北海道大学中川研究林公認ガイドなどと連携して地域財産の保存・活用を進める。
 ■行政、団体、専門、町民 ■R7~16



5-1 学校教材の作成・活用

地域財産解説シートやGIGA端末に対応した教材を作成する。
 ■行政、専門、団体、ナカガワノソトガワ、町民 ■R7~16



6-14 デジタルアーカイブの構築・運用

オンライン型の地域財産データベースを構築し、町内外の協力者でデジタルアーカイブを運用していく。
 ■行政、専門、団体、ナカガワのソトガワ、町民 ■R7~16



9つの関連文化財群 と 1つの文化財保存活用区域

1 恐竜時代の中川の海

本町は約1億4,000万年前～7,200万年前の恐竜時代（中生代白亜紀）の地層が広く分布し、アンモナイトをはじめとする保存の良い化石が発見される世界有数の化石産地である。中川の海は時代を追うごとに浅くなっていき、海岸付近で生活していたパラリテリジノサウルスが発見されている。



2 海生ほ乳類の楽園の海と天塩川の成立

アンモナイトやクビナガリュウが栄えた中生代白亜紀が終わり、哺乳類の時代といわれる新生代へ時代が移ると、中川の海はイルカ類などの化石が多く発見される海生ほ乳類の楽園となった。道北地域の隆起に伴い、約100万年前には歌内・国府地区にその河口が出来た。



3 川のほとりで始まった先人の営み

天塩川や安平志内川の沿岸には、縄文時代や擦文時代の遺跡やアイヌ文化期のチャシ跡などが複数存在する。またアベシナイ(我々の沿って下る川)はじめアイヌ語由来の川に関係する地名が数多く残る。松浦武二郎が安政4(1857)年に訪れ、アベシナイのアイヌの暮らしぶりを記述している。



4 天塩川と人々の暮らし

天塩川は交通手段を船に頼っていた頃から、重要な交通路であり、畑作にとっても、天塩川が育んだ肥沃な土地なしでは語る事ができない。一方で、春の雪解けや夏から秋にかけての大雨で、毎年と言っていいほど水害に襲われた。天塩川との共存のため、大規模な河川の切り替え等が幾度も行われ、現在の市街地が作られた。



5 大河と天北の深山

本町の標高は約20～700mで、溪畔林から針広混交林を経てハイマツ地帯まで、多様な植生の垂直分布を観察することが出来る。天塩川水系には北海道固有種や本町固有の垂種動物が生息する。北見山地を横断する天塩川は急峻な崖を形成し、森と川が隣接する渓谷景観をなしている。



6 中川の森と人の文化誌

本町の林業は、農民が冬季に伐採から搬出までを行い、生計を補う貴重な収入源だった。輸入木材の台頭で本町の林業は徐々に衰退した。林業にちなんで丸太を押し合う丸太押し相撲やかつてのきこり技術を競う「きこり祭り」が継承されている。近年、移住してきた木工作家や木材コーディネーターの手によって良質な家具材等として流通させる仕組みが構築されつつある。



7 酪農と北限の畑作

本町の農業は明治29年の安平志内(現、安川)の入植から始まり、小麦やえん麦・馬鈴薯・亜麻・大豆・小豆・薄荷・除虫菊などが盛んに栽培された。大正11年に最北の水稲栽培が始まったが、昭和30年に上川管内での水稲耕作北限が美深に決定したことで稲作は衰退し、畑作、酪農へと転換していった。



8 薄荷の中川か中川の薄荷か

大正11年の北海タイムスに「薄荷の中川か、中川の薄荷か」と掲載されるほど、大正から昭和初期にかけて本町では薄荷蒸留産業が盛んだった。気候が栽培に適していることや薄荷製品は輸送が楽であったため山間の共和や板谷・大和を中心に栽培された。輸入薄荷や合成ハッカ油の台頭で価格が急激に下り、昭和30年代以降、衰退した。



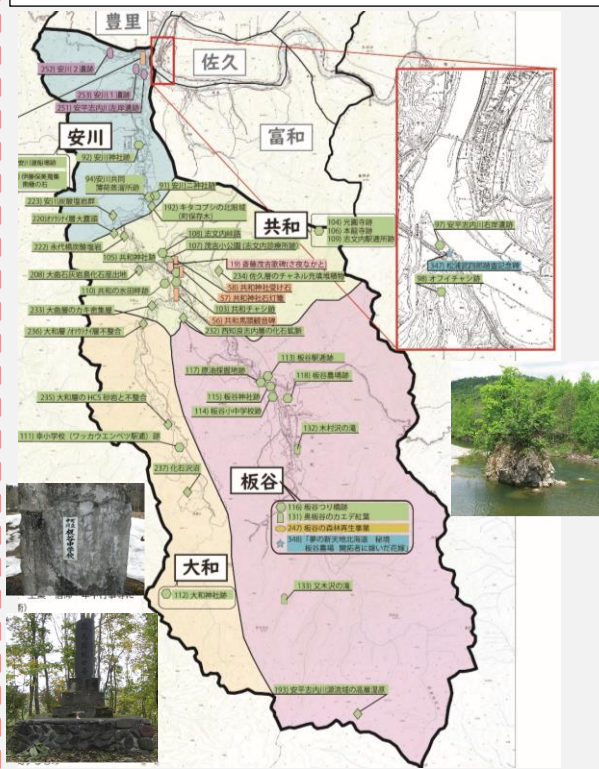
9 安平志内川流域の開拓と茂吉の足跡

御料地貸付から始まった本町の開拓は、安平志内川上流域の共和・板谷・大和地区へと進んでいった。歌人の斎藤茂吉は昭和7年に共和地区で拓殖医をしていた兄の守谷富太郎を訪ね、17年ぶりの再会を果たし、滞在中に57首の歌を詠んでおり、本町の当時の暮らしぶりを知る資料としても重要である。

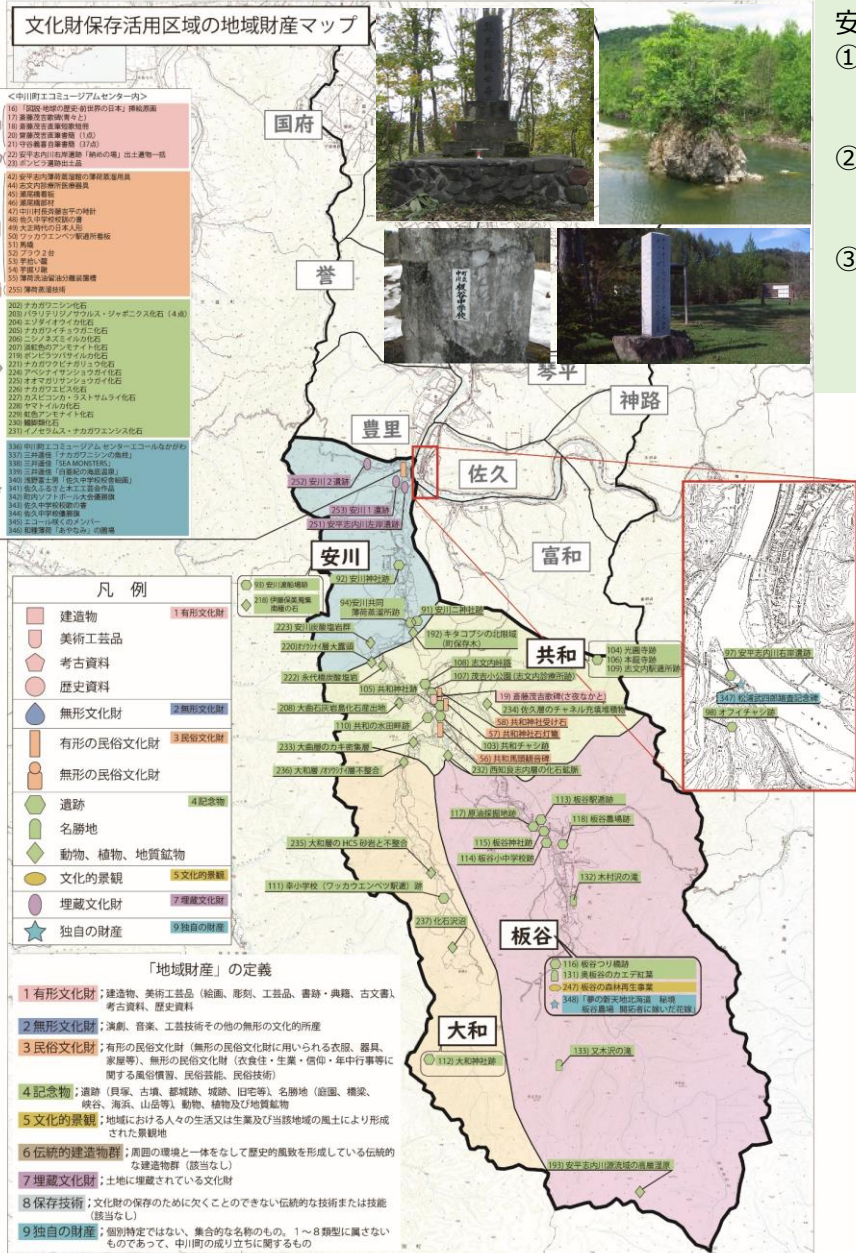


文化財保存活用区域【安平志内川流域】

本計画期間中に「優先的に措置を行う区域」という考え方で、“安平志内川流域”を「文化財保存活用区域」として設定した。



文化財保存活用区域【安平志内川流域】



安平志内川流域を「優先的に措置を行う区域」とする理由は、以下の3点です。

- ①本区域は、9つの関連文化財群のうち5つが関わる地域財産の集積地域で、文化財・地域財産を収蔵・紹介する中枢施設であるエコミュージアムセンターが本区域の入口にあたる北端に位置している。
- ②安川地区には8戸、共和地区は2戸のみが残り、板谷・大和地区は無人となっているうえ、高齢化が進んでいるため、聞き取り調査や地域財産の調査を早急に進める必要がある。
- ③安平志内川流域は、アドベンチャートラベルやエコモビリティ（サイクルツーリズム）、サイエンスツーリズム（森の学校など）事業などの主だったフィールドとして活用されており、地域財産の保存・活用に取り組むことで、これら事業の充実につながる。

区域に関する主な課題

- 周辺環境の整備が必要
- 地域財産の継続的な調査が必要
- エコミュージアムセンターの適正な維持・管理・運用の確立が必要
- 次世代への継承機会の不足
- 地域財産のデジタル化による継承が不十分
- 等

区域に関する主な方針

- 周辺環境の整備の推進
- 地域財産の把握・調査の推進
- 研究の推進
- 学校教育による郷土愛の醸成
- デジタルコンテンツの活用
- 等

区域に関する主な措置

2-12 地域財産の表示や解説機能の整備

ICTを活用した多言語対応の解説機能の整備を行う。現地の地域財産については看板など建てずに携帯端末等で解説を見ることができると整備を行う。

- 行政、専門、町民、団体、ナカガワノソトガワ
- R9～16



1-1 聞き取りおよび既存資料による地域財産の把握

北海道の調査による遺跡包蔵地以外にも中川町史第1巻には板谷地区での鍬の出土、共和地区のアイヌコタンの記載がある。それらの把握調査を実施する。

- 行政、専門、町民、団体、ナカガワノソトガワ
- R7～16

